



毎年、東北で行われる植樹祭。水源となる森の保全を通して海の恵みを守る、「森は海の恋人」の活動のルーツだ



国際協力の担い手たち

NPO法人 森は海の恋人

森への思いを育てたい

フィリピンで作られる砂糖の半分を生産するネグロス島。島の面積の7割を占めるサトウキビ畑と引き換えに、森は日々切り開かれている。「森は海の恋人」は森を守るために、人々の森への理解を深める活動を推進している。



砂糖の島」と森の共存目指して

日本有数の漁港を持つ宮城県気仙沼市では、高度経済成長期に水質の悪化から養殖業が大きな打撃を受けた。上流から流れ込む土や生活排水などが原因で赤潮が発生し、その水を呼吸して育つカキが売り物にならない真つ赤な「血カキ」となってしまったのだ。当時、気仙沼でカキを養殖していた畠山重篤さんは、「水産業を守るためには水源となる山や森をきちんと整備する必要がある」と考え、1989年に漁師による植樹活動を開始。2008年にはNPO法人「森は海の恋人」が設立され活動の幅を広げた。

「森は海の恋人」が掲げる目標は、森、海、海のつながりを大切にすることだ。副理事長の畠山信さんは、子どもを主な対象としてカキ養殖の体験学習などを行い、自然を広い視野から捉える意識を育てている。その活動が今、海を越えたフィリピンでも展開されつつある。

フィリピン中部に位置するネグロス島。一面に広がるサトウキビ畑は、平野だけでなく山の斜面までも覆っている。「この島では、森が切り開かれて山の保水力が低下しているため、雨が降るとすぐに増水し、川沿いの貧困層の家々が流されてしまうのです。海で行われているカキの養殖にも影響するでしょう」と説明するのは、首都大学東京の横山勝英准教授だ。



山の斜面にまで広がった、ネグロス島のサトウキビ畑。雨が降ると、表土も水もたちまち流れてしまう



川沿いに建てられた貧困層の住居は、ひとたび増水があればあっという間に流されてしまう

「このプロジェクトの期限は3年で、それが終われば私たちは帰ります。ですから、その後の活動は皆さんに続けていただくこととなります。また、取り組むのは植林などの具体的な作業ではなく、今後の環境保護につながる意識改革です。明確にそう伝えました」と吉永さんは振り返る。

その上で、二つの目標を定めた。一つは市役所の中に環境教育を担当する組織を設置すること。もう一つは、学校で教える先生たちへの研修だ。「世代が一つ変わるためには30年くらいかかります。それだけの時間をかけて、地元の人たちが自分で森の大切さを実感し、植林などに取り組むようにしていくなくてはなりません」

地元へ寄り添い、自律する支援を

た。その結果、流出した表土のせいで下流に行くほど水中の濁りが増え、飲み水に適さないことが明確になった。生物調査では、サトウキビ畑の生物多様性は低く、森を切った畑を増やすことが生態系に大きなダメージを与えることも示された。

これらの体験は、参加した教師たちの意識を大きく変え、彼ら自身の熱心な取り組みにより、地元市役所に環境教育委員会が設置された。現在は環境教育プログラムの作成が進んでいる。

これまでに東南アジアの数カ国で国際協力に携わってきた吉永さんは、「現地の人々が困って、助けを求めているのだけではないです、こちらからは支援のしようがないんです」と指摘する。

フィリピンは東南アジアの中でも教

育が普及しており、環境保護の大切さを多くの人々が理解している。その一方で、環境問題と現実の生活が具体的に結び付いておらず、行動を起こそうという意識につなげていない。

畠山信さんと吉永さんは、今回のプロジェクトで環境教育がスタートし、将来は教育を受けた世代がゴミ拾いや植林などの環境保護活動に自発的に取り組んでいくことを期待している。吉永さんは、「実地調査や教育プログラムの作成を通して、現地の人々が自分たちのプロジェクトとして認識してくれるようになりました」と手応えを感じている。

私たちに恵みをもたらす森と海、そしてそれをつなぐ川。自分が住む地域を知ることは、環境を守る第一歩だ。

横山准教授と畠山信さんは地元のセント・ラル大学や住民たちと協力して、ネグロス島の環境調査を行っている。「水源となる山頂付近では植林などで少しずつ木々が増えていきます。その一方で、砂糖の生産量を高めるための開墾も、各地で続いている状況です。地元の人たちにも水害や土砂崩れなどへの警戒心はありますが、対策への意識が高いとは言えません」と言う。

ファシリテーターとして現地に渡った吉永栄一さんは、プロジェクト開始に当たって自分たちの姿勢を示した。

ネグロス島は砂糖の生産に島全体の経済が大きく依存する、典型的なモノカルチャーだ。現地の人たちの多くがサトウキビ農場で働くなど、砂糖産業とのつながりも強い。「そうした社会で、サトウキビのために森を切り開くのは悪いことだと言ったら、現地の人たち、特に親が砂糖産業で働いている子どもたちを傷つけるでしょう。問題点を糾弾するのではなく、地元の人たちが自ら課題を認識し解決法を考えることが必要です」と、吉永さんは指摘する。

そのために、研究者、中学・高校教師、住民が参加してフィールド調査を行っ



地元の人たちと共に行った水質検査。下流に行くほど水が濁っているのを見て、地元の人にも森の保護に取り組む意識が生まれた



地元で設置された環境教育委員会。中心となるのは地元の人たちで、「森は海の恋人」のメンバーはあくまでオブザーバーの立場を貫く